三國
門 船橋の所ゝ
紀言もゝ
門 東ゝ
一所新
京
三國
橋四ゝ

高橋蔵書

発句服中六法とも連歌よかるべきもの心詞の
ちがへるを誹諧といふべし先発句は四季を云べく
切字の至不至を中一とし或は人のおもしろきを底な
るべし詞のさまをいふ又はかるべ
人体ねも詞のつきよかろ口と中ゆも
有て猶発句よりも付ぶと遠へ句の氣
あるべく韻字を中一とするもよし中三は付ぶも
心もかけるもよ打試ふのべやすよ仕立べしよ

是皆連歌のなごりにいまはおもはれぬるまでに
みな法を破り異風のみまなびをなすのみ
文字をあらし人も詞もをのゝおろかなるまゝに流
れて上古の功者のしたをけしあくまで京田舎の
歴々まで信仰やうやうと尽くるまでに
連歌なかりしも生涯に組てあらぬを
貴し誹諧いうやうの物よと思ひ入て同じ用捨う
しろ付打越をもきらひ連歌
さくかくのごとき異てを言葉道理に誹諧の道
に倒て次第しる云ふるはあるべきものゝ連
歌の付ハ句体の仕立てにもかゝわりて何をなと
して美悪を思ん併まことの連歌といふ物
事あるべきとハうもの空よハ書きつるべし先古
さい連歌を用ふ〳〵次子細あるべゝ誹諧
古さハ用ひ同意の差なのるし付きやすくて
いつものゝ面白さとハいん功者と思ん御

ろきといふ所にすむ時このまへの文字も
あひのうたき世話をやとしすると所白くもおかしくも
思ふ文字を四しやうきいやしき人の子の
上者はいはゆる又八卦山の風流四季物変何ものも
のこそ実と思ひ合されぬ無あるものをうそに
仰ものとまてるよりふる俳も京形ふるものも
まきのひろく者へし馬をひかるも中孫さくも
うきうるきし勾仏をやとし生涯の独人にて

まて推せるるハ砂うきの事かし連歌の
をへ事生涯ハ賤くしもさ人の口孫をせ
よ田舎人ハ京の人ハ人もちふとしきし何しよ
賤き詞を中ねん人ようる後人を付て俗の
心詞をよ学ふし
発句ハ仕立ようハ拙よ学てふるの数し
拙よいひやすすもあり心人の拙をうへかも
すると大ふ仰るやうるとも心とかるちと

彩似をもとゝ各のおを学ふも有し
又学ふ人ちよせちして去ふ有様を
ゑゝいひつるもあり其様を人の句ゝいん
ハ何やうも有へきハ自句を半付ゝかゝる
所をよく学ふ可し

去年ハ発句のみこゝ学ふのゝ
元日や日本ゝ字ゝ
ゝふゝ去や可イの こゝあてん
盥鶴のゝ去や廣さ佐代丸去
初ゝの出あひ二の社よゝ子日
世ゝゝや上ゝゝ花の春

廻文

春ゝくれゝとゝそゝとあゝさん

春秋の迫文

名ハ彩端梅ハ常もとも案不用い
おりめそよもとたたん萩の宮

春秋同合　是ハ歌ハ[illegible]

底の名ハ主つ支とも名よ不付の事
唐の詩賦よりもとすし花の志

迫文　月付句

つとめて式友小鶴とをとつ

みふ冬の景　池のもふ波

漢和　月入負

紫回春潤色　是ハ回春ノカリと題ノ事

相なりの差やけ付　本艸ノ狩ノ付名

仝

風午入持扇

帳のようにすぬ蚊の形

仝

文月可申入

なをもとられる空

仝

光儀 窓始雪

学者の社を思ふ窓辺

付句うぐひす

却るて花や梢の寒ひ

尺てつくよる春の百る

是ハ風のつくよさけとなるせとる秋

犯るも夜るをしさ

蕨ハ山の日うゝ日おもゝ

る釣の学るやゆふさ

寸髪のあらし苔を思ひ

我るよ似るふ孫ハかゝ西き

青月ねの影

うちもつくまひ

鉄炮ハ雷井の野を用ひてする
ものと絶てうるさせること
天神とてもせるあるべし
第一ハ国力をうのみことふ
小神のてを七代のそうとうをせう
うまハ新あの神さま夫婦の孫と立す
ゆ神をいつ
他人と他人ハよくゑんゆ
縁ゆ孫よ夫婦の定くゝ

けれやゝ夕伝をわきまへてすあせ
思ひきゝ近き新あの神さま夫婦と
孫ゝんゝも他人の孫ハ孫さんゝ
ゆくし
つゝいたうあゝ今ゝ我よゝさ
志ゝゝ古則の教と異ゝて
是ハ京のとゝうしまてとの連歌誹
諧の連歌ハいつも世代ゆかゝをいと
神をんひいうゝと先人の世よゝ
古ゝさ連歌
花と花と多とあゝふ

川岸に夜やらふきの咲きひて

ときつるハやう行を風につけて俳諧
あちこち浪よろ々に往かふ舟すれハ川
岸もありていふへきにあらし

川水に山岸の影をうつしめきて

かく一色すくも付へきにあらし水に影
うつりて是をあしらふ也　水と行て
岸とすれハ其人あさき也し　おもて花と
いふる咲をふと付るも古てしかるを
用ありるれ是非に及ハん　但かやうの
様俳者の心にまてらひし　若しうるはし
きれ

山岸の雲月とり来るやおくらまん

是をよしと定まり此付やハ西と
東秋と晝白きと黒きの類よろしよし
と定れた人のふかき付やハ様々
皆對付よ以安し　是ハ第一の低と見
ゆるし　但其句まり何とし付すへき
所ハ只やうの對句も能く句毎に
人をまなへハいやし思ふへし　文路の雲
の付句ハ花と花やうけるにひらきまひと
且是をやしと付るハ付て當世の人ハ
暁ふ一

はないふをすくまふ古つる事也　二ツめとり人とも人一ツ
よりはるときも思ひのまし　かへしそ也あるし人と云

もの我をたてあやまりかくふしたいく
しるしるものに人のまねをして何ごとの人の如く
きるなどに人にうるのもと思うまじきこの
きと士家なるまじと思ふ人も何ぞ拙き毎
慢心をおこせしこと間まるもよくなるべきなれ
し思うしたのやうなるものに有まじ我も人も
口をそろへをせるまをとまうせるふし誹
謗の発句分句も始終同の不しやうや
さしく上よりめしさし有れすすよきものと
業こしこと下もるし有業とくをもを
うける人の一字つて雑ちくに人やもと敬く半
つけるのぬ有さのうちに半ほされと
うつのもをさかろうきに不をあせるも有し
一字つもかきつ孫てもよきハ雑業とまれ
きるものと人をめ我をこ次ぎ人ほをいハ
人うみる主ふけきるいるを業をくやいする

寛文七年
六月廿五日

主圓
半川

長歌

花さくころ　いかくるあれと　名にしおふ
雪丹の原に　日のうるそよ　神のまそかし
ふるさと　恋ふるの風　ふかしひろ
百歩の外に　人まそも　さくらの花の
見へくる　たて成つくして　深小神
ゆきふりて　冬　中々時も
ふるの山に　人よのいかさ　みちもそ

かはきおとうは　森見堺の　栄花のまこと
きこしより　人こゝろし　ねたみ身心
そのしきしのも　世のうさも　入てわすれ
青楽に　ちやさきかな　かくら人
おしこと女も　いまたしらに　人はそこに
月もくまなし　あまは雪こそ　かゝるなし
にほひそ花の　さくらそこし　東路もさしみ
来なとこに　ことさら松原の　景のこゝ字

そろそ枕　わかれひ　にほひ行くさの
まづその花に　又さそはれて　朝まだき
なかひたま銭　よそへまし　いろ祇園の
家見たり　さきしひさる　花の肌
うつくしの広お　大のそれに　月かけそよの
やすり札　いくさきつも　ゆきさとか
松原かくよ　茶屋の茶は　立まさ人の
縁となり　人の川に　そのそれの

あうよ迫の的場より　ゆつのとも
さくまの　をこのえも　みるまれて
越行かいふ　ちねすみ　なるうめの
苔をしき　ちるさくらの　ちるさくん
清もからくは　長栗寺　ふのりまき
むまの附　かくねひも　くさんせをん
ひうあまねき　花のやど　ふるさと
かくちくは　八坂の塔　おりえゆり

さて其末　あくまをせふ　法法の華を
霊山の　まけふ芝花の　庭をくん
師匠に　ちくさ花を　風もかくの
あくりと　水をくさて　右ひくう
群集の中に　ゆくしくく　乳やまの
いのくるる　るやをの塔　さくまをとよ
南無やくよの　古ちくし　世くをぬ
めくくく　花の滝波　清水寺

なまし路やゐ　吉祥山　峯は上人さし
物さらし　地蔵現の　庭さらし
手しおく深し　承継さらし　典一まれの
あさきさらし　打て帰や　家さらし
かく数しの　名木や　三木山の人乃
抜山まる　貞さ尚し乃　世とのまる
人家しとの　やさしさ浅　吉さ丸かうの
人乎足深きや

みなみハ
手つら法花経川　観世音
三圃

乃至小

我をあひまの
旅ごろも
ゆふさるたの
せゝりあきの
くるみやこの
もゝやまの
花ゆかうさと
ゆくさかい
日とり立しも
よさき友千
あちこれ山の
雨そゝたに
きさやまれの
ほうしさん
日のおうしける
けうさとて
ゑのようもの
あふさうの
関のさゝぬ
あふみのうゝの
彼まゝも
世代千
志つゝうり

陰の名所

糸つゝふのの
やまもとに
かしころうた
うれさつる
引茶ハ野政の
ちまさく
泉のてき

うちぢのつちハ
まるしやや
苔よすつふか
野田のえし
いまちさを
草津まつ
半ちゝふ
小ぢ

大王の
盃もうた
羽のおし
かりしはる
おもひや
石をつゝむの
よてゝ川
せゝつちゝの

ゆきうら
関の地蔵の
今生の
八日ゝ
おうをふの
ありさゝ命
ちゝいも
詩をさゝ

やもれ沢
湯枝。
外まゝこの
四日市
あゝつ
あふゝす
ちやはす
やまもれ

せやちれ
おうやまて
南天葉
うちてゆく
志川人ハ
浦風野を
柳のうへ
宮の花ハ

夕日うけ　きく京坂の　五位塚は
祇園さくらの　大宮千　ゆるぎふとりて
二王の　山松の下ゑ　いや高し
七夕みちびき　きりすうも　荒井の波千
紫さくら　数やそもし　浜松乃
下り川の　多よりてふ　大天竺や
小てむ　小けうた　羽とめ
うふぬ市くに　いそけとも　ひうち山のけ

うえつて　ゆうしのぼふ　新坂や
月とわし　月ひ餅　さよの月さ哀
月よさく　川ぶのてふし　ふきうれや
大井を引し　又ぶくを　こゆ波の
笈枝や　思辺よつく　細道代
うりとと　うりのゆま　半人この板
ふぶちう　ふゆ人ふ　ふきても
出へうう　ふまさま　ふみさふ

住吉の
岸のうつの
みほのうら
玉藻もて
いつの山
つもりて雪の
いそうんハ
よしの原ハ

旅そとやめも　きつをふうら
月きよみ　仲津の渡し
はくむ四るの　由井の浜
岩間の　ちりやつもて
代このこゝもの　花こそハ
あ[illegible]ぬ　見をんすて
らくきつぬの　ありひそよ
ならふすし　うき波よさぬ

まつしをを
年月さつぬ
道とるふ
するかるり
さるすゑ
なのとてハま
小田原の
大磯小いそ

いのるみ[illegible]の　高はー雅
山中も　月のひ[illegible]
古代の[illegible]　箱根山
かしの木社　さう枝す
由もとの茶屋の　下水も
河とふ[illegible]　月未とゆき
黄代小と　ありぬし
こゆるの　いそけまる

ゑつらの　　松よりひて　　さうく後
さきゝぬきうう　　風のおと　　つうとゝふ
道のほと　　うやゝるゝ　　ゆのまゝ
ゑゝよとむふ　　人もう邪　　うるふうて
まゝのの　　まゝうのゝ　　さゝとあゝの
馬人つゝふ　　西川や　　きまゝうの
あゝあゝ　　ゆふやひの　　も見つゝ
花さゝ四と　　乃我ゝもゝき

いまゝやひの志つゝさゝ江戸ゝすみゝ四
等連歌のたゝゝ人ゝけゝれとすけゝ友を
やまゝさ一とせ四ゝ千句をつゝ
又人ゝの好めゝまつゝひ武八月ゝ富ゝあゝひ
八絵ゝ西にゝゝゝ上の句百あゝゝとつゝふ外の
人ゝこゝやゝのあゝとゝすけゝやゝ句をゝ
とゝ天せゝれゝる巻お四五百ゝ及ひぬかゝゝを
してとゝゝさゝゝれの法の都も門ゝゝく

俳諧おもひたちしすゑ一月ごろの友をひし
まゝ生ひ立ひよろ〳〵ながらおもしろき向のぬさ
なりとゝ公の御はしをよ俳諧するとつふやきあり
ハやまゝて京のとゝひさし宮やあり山のはして
すゝ人の信の酒の盃さしうる思ひむの筆の往
まゝハ世をしの世つゝいみやこのうさうろうろや
ふうさう人世をなゝし

立さやまるくむやうすゝの関ゆくを

せゝとふゝろ〳〵我世うるの人をゝ合ハあき法
とあををるおもひめゝ

老すむ月も言をしの風の那

成次といひしハ身未言ゝ友ゝ〳〵せゝふ
をゝのほゝるも人ゝをゝくつれゝちゝゝ旅途の
句

羽をゝ〳〵まゝう帰ゝや旅の空　成次
うすむ雲井ゝ中ひつゝのゝ　立圃

もの〻ぬのいきめ〻さに出そうするとゆんうを
みちのくるとやうに江戸のるさへ〻さへ
又住吉の市といふも見るやうにすると我
相〻〻そちちうもしも久万少納と秋よ
うるうにと人を慰め〻ふ川といふ所まうつつ
らふまや京の中すまひ海の中さもてつ
ちゆとおやく筋のこと〻〻
江戸よりおとる色ふうふ岩の波

川さいとふふ〻屋敷飯せとふふ筋の
ちゆひうくてとおりさに江戸より遠の人
のとくるき者物とてもるもの
岩のうう多ハさ〻つ〻さけさうふ
うの飛川ふ〻
盛うか河ちさの栄乃原みと色
うとゑの里
里人の上帷子うすうしみ

ほとゝぎす戸ぼそとつたふところを見るこゝ

いつの日とゝやと待ふ花の立

夜沢といふところをすこしさ坂あるを見るこゝ

夜沢や蕊ばさのこゝて社ゝ坂

こゝつゝの小家ある蕊の谷に糸を入こゝ

蕊の枝や戸ぼそこゝつゝ残る家

大残ぶいそ

遅き日の旅やゐいそさ大いろ戎

小田原

すきこゝすゝ小田ゐ、ゆ、さすゝ

箱根ゝ雨ふゝ雲ゝ中

峠のやこゝとあゝまて

春雨ハ箱根の関社か雷ゝ邦

まこもいさまこと祢峠ハ雨のゝみ

三島ゝ雲晴四方の山

かすゝろゝられま

書つゝもこゝまゝみゝ春の立

沼津

そこ和まぬやまかせやせよ春のこま
うきしまるまるとせまとせ春
浮ハ名のしるすすめの船
雪汁や又ハ川の花ハ影
かんもるまる
美弱や桂人まむ春のくさ
ハの花風ハ山の外まる名ゑ言られも

いふ及ばれ昔より実ハ御さむ人ハ京
雪の夫ハ春ハ時みも沢すと詩ゑつくるゑ
のハ花いハ月まとよ京いつ沢ハあうとえ
るうすしハ由井の浜ハ春みほの松の葉乃
茂う世ぬるゑハ名まましハ又さふえるひもら
いまうるのるゆふおのとする船ハあまの下りと
まる文字ハ学ぬ小旅ゑつくるふ乃せて
うるひとめ学ハそのまハ行ハるゑ世

てんのきくさに同じてとよみもひとくさ

富士の名は雪のすがたやうるあるを

句はいのまとひら秋も

谷しは流しふりの雪をふる　朱公

のぶうちる冬ほもくもやこのうち

ちまもてそ雪をまくまくはる牛の涙

七夕のはさうの名やゆみの涙

映画や漢村るこうすも清人うち

はるのきくさは清人の関の番

雪や玉面向不宵　月の山

こうほのうち当門うる涙の乱引ふ代

天人の衣のみほのもふうすみ

仁鹿まく

ようくしく儒家もへ向書い

斉中

遠き日は不忘くふ侍の老

まつこ

ふるくと山をまつてせの筋の有
畑をやく火おのいやつの山
岡アまく行るのるいるをさくく
いかこをとる梅のくるなのさくの芽
茂枝ハ霞まりけく　春の歌
ふるく柳の髪や金田うけ
春雨もよさよ立荷のお月ね川

みをくてらふすみのれやく
さよの中山
春雨もこれや名ふのさくれ
新坂や人くる坂ひもち
鮎川まく清水よとのまこ夜一よ白さるよ
うけ州や原のまくみ名の炭
袋井よ咲山吹やこうのいろ
山梨といふ袋井より一里もうく山さくく

こゝに村松のふるさとに人あるうま蛟を
しることあるを喜ぶこゝ生歌の句
山梨や名ゝ世捨の花の友
はるかなるあるしさうなる人の
うちいるゝ時くゝ戸をあけつゝて
つゝまひおせるを我も旅ゝ
新蕎や松を勢て千代の春
はる在ふる西福寺ゝ連歌をすゝる人あり俳諧
の仕やゝいうゝ所ゝ
まゝゝうゝのもゝあし花ろろ
人付ふゝ
ぬるみなも人仕ゝ宿の蛙
天竺の川はゝの馬ゝ水ゝゝゝゝゝゝ
ゝ
ゝゝ水や天竺八月
陳松ゝ蒼原や對の花

うら山舞浦よりせまや花の比

芸井とハ名まて何たる芸の波

志つすゞ

漢ハ今こそハ蒙せし志つ次浄居

元とゝのすゝめこの流しまや堀ん坂

めつ川やこ阿まつぬまちの日

萬代よ祐やよし雨の下ころ

立つゝく茶屋のあつめやさくら町

浄摂山ハいつもの人に花のころ

茶さこのまゝくいろまき捧せん

珊瑚珠の茶さまきまきに玉楮

茂川

川の名ハ流やうつまる茂ともえ

圓清

永き日を笑ひくらしく旅の道

池鯉鮒の明神社花垣よ根の松あゝりせんを

まちひて

垣の内やふしんに宮地見とる哉

鳴海

頼もしき御代の風そ旅人の道

熱田

みやとりくゐみぬやありさま宮盛

蛤か月すけうすむ伊勢の海

此浦の鯛や名にあらいまさく

桑名

志ほらしく宮の名やゆるいせ桜

四日市

明まち一二三すむ三の都

杖つき坂をりとて

まちやいろはよすゑふつえつきれ

日うり不東風や菜洲のぬれ木りく

亀山の尾ささも有りさし日あれ

うすゐも道にはすよ〳〵関の地蔵
を拝るとやしすこの見あさ
ま山もかすみやいそつ〻
小夕ふくゝゝる四すゝ
羊羹やをんなのいとつし
尊津のあるに子共のまこ所ろ成
里の名の春のまつむる花ゝ
まこの日やうゝゝ見すせるのはし

小うみやうすゝとるゝ硯箱
あふさうのせきうひせゝ多寡

山科花山

外ゝやすゝるまこそ花の山

日岡　栗田山

まこの日社おうむ利生やあゝ山

都入す人あゝゝ有ゝをゝゝ

旅人やみ屋こ春る帰宅

芝安四年三月日　　立圃判

西山梅法師二十五回忌懐旧之俳諧
寶永三年三月廿八日翁ゝ自書
弟子像前ゝに向ふの壁有畧
世のしなの栄耀栄華の法ゆ花ゆ月
一炷一香一磬乃　ちれ
むまりの妄乃潮煮　ゆるすへゝ
ゆかしかせ春ゝ頭巾ぬゝ人も
是歳の思ひさ清水さすろしと

文化亦八歳卯春五月下旬

黒いとしろいと鶴をやしなふ
糸を研つゝ書よ墨をくらふ侍人
竹の折戸よ　松の本すゝ雅
西のうゝ月うゝふきて時ハ八ツ
蓬のさいゝて笠をるぬをつゝ
彩染すふさゝのゝかゝてハ
ゝのみふゝちぬゝせゝセの歌
宮しゝうゝぬゝをぬゝ　原門信

夏むよやゝうゝ
魚うけやあゝまゝおゝ蜘蛛の絃
木をいゝゝせゝしゝの多
生涯ハ八十年の宮社中
雷のくゝふゝれ轟ゝて
百里あゝあふ京口のゝ山ゝ
ゝふ金鈴の尾ゝうゝちゝ
釜ゝふ壱波　杉風山ゝ

いふ所

羽栖施行寺

長柄よ羊養の鑾輿ふるゆめ
昔盧舎那仏を宿りみるすふ
物云のゆめもしらさりしさの巢
伝聞のまうすらもしと
桐干の大北竹壇五六尺
髮さらくふとうまつ櫻桐の葉
又一月八神護慶雲三年四

ちちのか ぬとろの紙
盍狐なるしはるるをつ
鼻尺八ゆみ ゆきをすふ
小うるるうう 古兎の煙をぬ
ろろ巳しるる 羽駝坊
人のふいや法ふふ 寺の法
時 三月 廿八日

寶永丙戌三月廿八日

名人の澤なるもいと珍しく
狂歌一首つゝ添てとくとすゝめぬ

むかしいま名ゆたかなけんくちの庫の
ふるさとの梅ばかりうゑ

大地震祈祷連句

人世の大変のことしと唐の本ゝ示す書し
生業の中より業もあるも天災地妖の大変
古へも今も寶永丁の変もの
そ出つる神の月初の巳の刻ばかり月も
ちと穴も隠るゝ乾の隅より揺ゝ
地の底ゆいつゝ人ゝふゆふひ生付る
はゝに玉井の家あるゝ岩あふハ彼寺社

の儀もうかゞひ杉さまかゝる是三千餘新の奴
とゆく〳〵ぬきまへしの事ゆるしぬよ名をおふ一の例
のおもてより二丈餘も立まさし怒潮暁汀せのむ坊
ひおそろしくいと大きなる舟とも中くの事也
ころゆきいくらともなくもろ〳〵河の沖にて白浪
うちいきをしいれもうしし卅五六櫓斧もて
さくこそ〳〵の二もとゝふ碎けそうし狂不しよ
のえらく一つこふなやうに男女老少の二三条

あきなる血をそゝぎ背もひしとてあらところ
よむすしくなりぬもろし足を空にしてあるゝ
もしをこゝろくしつまりあしにゆくをまつぬ
せなりし商賈ハかのゝ業するあきうものとやゝ農
民ハ涸渉をめよなしきそ武士も草をぬすと
ひとてわしとし忠良の影さへさ雷霆
のさわかしてとく目もみ耳もきゝて皆気を
のしつの三光よ乾坤も怪付抹殺せらるゝと

好きはあへてせりや露宿風餐の蝉のをとも木
ずゑともぬれし袖にもあらん家の夜くかしこの
膝栗毛にあしたなき身のちるよしと思ひしが此ひとり
も安きにこころもくるしき仏をも忘し神に祈声しに
此つむ志あまりしも一つにならず寒難禍福来てさら
に人力のおよぶべくもなし患天のなせるところひ
なとえ死生も天命に安んじつゝしみならに
又我はなしとわきにするに妻を携へつゝふる僮

僕をとゝまりて一こゝちし柏もてむすびける小さき庵の下
にすみけり古人の宜ひし動静一時の思ひを
忘れ泰然として庵にぬらして近頃より
日ごとに会りて山本といへる隠逸の人新治
筑波の情にあそびありいさゝかのもちらはとまり
ちくて上下の句を綴り以初をあらはしと
よくもあらぬ発句して天長地玉作派の加護
もあれるとて十七字当字の中になぞへけるとて云

詞をもいれて山本あるいは金やられもいと
おのしとく筆をふ服半三出きぬさふ百年
みさしめもと月の根ものあるふ五月の根をけ
てみくぬ人のるるもは十年弱き歌根ハ
苦をるるるるくをもいふ人もあるとこの
ふ悪逆危機のうちも自分の恨よ人をあそ
きめ金を知り極と建る重傷よりも人をた
るてそいるくうものるひするふ生うもあら
め殺るるの根弱るるとも生るもるふ頭をうあふ
き連行るるぬさりまま裸をうるるる人ハ
をうるるる女見と丈夫のいるあもあるとと
月ふのいの人月ふんや後人るる白の
るのハ吉原吉るふぬ

吹ちらす春の山おろし　小嵐

冬も残る戸ん　雪の戸乃月

樵夫の山の　おぼ木ぬ中

一ちらしろき　谷河の水

日和ゆとゆ　ゆきもとゆ　旅ろも

祐郎の　手　ふる　すり

ゆ　しの　静けさ　信　ち　雑ゆ

いとや　ゆ　ふる　ち　彩の　浮雪

雪ちるゆ　ゆ　ゆ　ぬ　言ハ　て

苔代水の　ち　黒ハ　ち　ゆ

山里の　ふ　ふ　ふ　九　ち

ゆ　し　ゆ　ひ　ち　ち　ち　菴

日ハ　ち　ぬ　い　ち　や　今　ち　ち　花

家　ふ　き　つ　て　人　ち　ち　ち　て

春　ち　ぬ　ち　て　ち　あ　ち　ち　ち　ち

ち　ち　ち　つ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

弱舟にしらぬ夜の月をあはし
ゆきかぶとふ　初雪の舟
薄とのしら舟はるゝぬ海路の
てらの紫やくなみの玉山
風さあまとうとぬ雲や宮ちん
霞をもり　春の　岩ね
下ゆつふ友をきふのとゝ
高き田面を　春ふ山路

夕ゝのうゝ八ゝ　海を
左ゝ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ
かゝ川や　ゝ　風立て
秋をん世ゝや　ちふ　柳うけ
春ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

胡蝶子 祇園の藤ハ

市もゝさく風のやゝふ芝ゝ

ゆゝしき宿ハ筏を誠ゝ

さゝのまくゝ水のきりふ滝川

大きなる鼎ハ中も知れかゝく

岩のうつかも明きてぬゝ

朽きゝ尺とゝるみゝ 杉一木

いろはるゝつゝはふ芝ゝ

家附の宿のわゝハふゝ

都ゝ行ゝ 俗 水

左迄ゝゝきゝみのあゝ月望

杉ゝつゝきハ人のゝく事

月ゝ入ゝぬほゝすの上を蛙ゝ

うゝゝ風のゝるゝふ声

うゝゝ女の神や小舟ゝゝ

ゝゝゝ行ゝ 碎をゝゝふ

尋よう者小ぬきちる花の下
風ちりをはらふ初蝶
春の野もあるうきぬきのふふ
積もしらく雪はゆきつつ
白髪ちりてうきふきまひ
才ゑ行ちきさはまつし
いつるてしろの淺瓦うまし
名はひよ池の月かゆ花を

蓑の雫もうれぬとはまはすて
世は秋ちくしあく紅ふ
かうきとものいうて去ぬ
はちるもきはうれとまも
せをてゆる猿はれく日も山
さ秋さうふ松くの紫の尼
松の風松のあはる月はゆく
こけをすくきく秋山

更に行かんかたや氷ゐし
一のすみも吉野の春の　雪うもれ道
思ふよ　ひとりとまつ　ゐけ雪
待しこころの法さんん　峰
雲もやかのこのもとの　雪の去
ゆくへ　ゐ日ゐ　ゐ
吉野山　神の降る　精鈴洲
外も言ふ　すゑの法法

うてたうゐ人もねぬ　琴衣
鎌倉の月　ふけふ　ろ
宮の表よ　ゐ　秋やうき
ものねぐ　わふ夕風
遠ゐ雲　山ゐ
秋ゐ　ゐ
ゐ　ゐ
つ　ゐ　ゐ　ゐ

問よしを朝ゐさしき古塚や
古ずやつ孫の卧ふあるゐ仏
拾そとる〳〵蓑 柳度の 影の中
むさるあ〳〵る寄も ぬゆるき 市社
跨籬の苔の月 小の 秋ちし
このもかハちるれ〳〵月ちめふ寄
塵とふ〳〵 影人の小河れ 風の寄
うりのみとる我世うれし

おとろ〳〵ふるさとる老のおとろうま
窓ゑ〳〵てれ ちゑ 夏念
あ〳〵つきの扇の下いふ 恨ちひ〳〵
ぬ月四れ影の床まれ
うちわ〳〵ちゑ 仮屋の中れ仮あさ
を行〳〵井ハ 風やわり〳〵ふ
かく〳〵も 山ちつゐぬ 市屋ち
うすむひ ひ〳〵 〳〵てふ 小車

人あまた寄りいさかひて
うるはしきを用ひつ俳諧
説法も用ふる寺の宮乃時
ものとふ堂の説もちまさる日
あるゐ句やうをおもふるの雅もまろひ
ひのくれ詠歌をもちて文の巻しも説とき
てあるさまのものもあれと祇園会余
もいとも記事泰然として日のもとに神仏の

世ときさまをおもひ合つ家の様ふ一ゝ
うさつゝ狂人を志ひたるぬ

世の人みてすゝこゝもあるねの
はちまつ門先まる 神の市ち雅

右一時軒直筆ゝ藻塩中抜萃

高橋蔵書